みの MINO EDO
東京　笠原情報誌　MAIL版

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会
TEL 0572-43-3218
発信：多治見市・笠原町東京情報局
tilesea.ms@gmail.com

＊協議会のウェブサイトでも公開しています。

NO 241
2025.12.17

CERASTA 2025 開催

タイルで未来をつくろ舞い

11月7日（金）～9日（日）の3日間、岡谷鋼機名古屋公会堂（愛知県名古屋市）でタイルの祭典「CERASTA（セラスタ）」が開催された。会場は昨年の大阪から、焼き物の産地である中部地方へ。前回の内容を引き継ぎつつ、学生を対象としたコンペなど、新たな企画もスタートした。



会場：岡谷鋼機名古屋公会堂
1930年築の登録有形文化財。昨年の大阪中之島公会堂に続き、当時を代表する近代建築でもある。外壁をはじめ、室内の床や壁にタイルがふんだんに使われている。



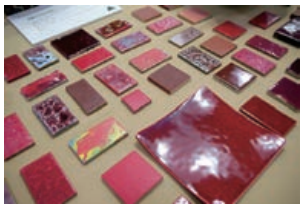
タイルディスカバリーの各ブースでは簡単な体験もできる。







ジブリパークで使われたタイルでワークショップを実施。



焼き物の赤い色には金属が使われ、その種類によって質感や色合いが異なる。



2つに割って作るテッセラタイルの相方を当てるゲーム。



廊下にスワールドカップの応募作品を展示。



オリジナルグッズやタイルを販売。

会場は4階。メインとなる大ホールの中央はタイル職人体験スペースで、周囲を「タイルディスカバリー」の展示が取り囲む。「土」「水」「形」「色」「火」「彩」のコーナーを回ると、タイルの成り立ちがわかる構成となっている。9日は午後から久住有生氏、高山登志彦氏、白石普氏による『左官・れんが・タイル 土のインスタレーション』が行われた。

ホール脇の集会室では、コンペ表彰式のほか、座談会やシンポジウムなどを開催した。ゲストも複数招き、新たな企画である学生を対象にしたコンペでは、審査員に小山薫堂氏を迎えた。座談会では日本画家・彩蘭弥氏、現代美術家・Marino Funahashi氏が登壇。タイル業界外のゲストから新たな視点が提示された一方、「（イベントを機に）街中でタイルに目が行くようになった」といったコメントも聞かれた。

「釉薬座談会」ではタイルの原料、釉薬、顔料を扱う3社のプロフェッショナルが集合。専門的なテーマながら、エピソードを交えて一般客も興味がもてる内容に。「焼き物には色幅があることを受け入れてもらえれば、もっといいものができる」と訴えた。シンポジウム「タイルで未来をつくろ舞い」によりイベントが締めくくられた。

来年は、10月29日～30日に横浜（神奈川県）の開港記念館での開催を予定している。

the TILE competition
「お風呂をかんがえる」

審査員
小山薫堂氏（湯道文化振興会 代表理事）
大西麻貴氏（建築家）
竹口健太郎氏（建築家）
座間望氏（インテリアデザイナー）
白石普氏（タイル職人）

今回から29歳以下の学生を対象にし、タイルと空間のアイデアを公募するコンペティションがスタート。今回のテーマは「お風呂」で、応募があった120作品から最優秀賞1作品、優秀賞2作品、入賞23作品が選出された。8日15時から表彰式が行われた。

最優秀賞の「極彩に煌く水晶」は、旅館に併設される、川面に浮かぶ球形の浴室を提案。ガラスタイルで覆われており、時間帯によって変化する光の波長により、浴室内の色が変化する。「インスタ映えするし、実現すればその土地を世界的な観光地にするだろう」と小山薫堂氏。優秀賞「タイダル」は「銀彩タイル」を用いた新たな風呂文化を提案。温泉の硫黄成分で色が黒く変化するタイルは、磨くことで輝きを取り戻す。同じく優秀賞「きっかけのふくらみ」は、足の裏に心地よい「触覚タイル」を考案し、それを用いた銭湯を提案した。

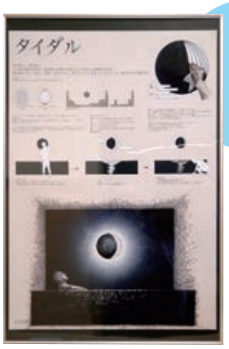
後半は審査員によるトークセッションが行われた。「変化しない」というタイルの常識を覆す作品が目立ったことに言及。エイジングや味わい、記憶をタイルに付加することも可能ではないか、という意見が出された。一方、木や石など他の素材でも良さそうな案もあるとの指摘もされた。小山氏は「これまでタイルについて考えたことがなかったが、タイルに視線が行くようになった」と話し、次回はタイル本来の魅力が伝わるテーマを設定してはどうか、と提案した。



最優秀賞の大竹さんに目録と手桶を贈呈。

最優秀賞
大竹 平さん
「極彩に煌く水晶」





鯉川哲平さん「タイダル」

優秀賞



佐々木理彩さん
「きっかけのふくらみ」
–触覚タイルから考えるニュー銭湯–

スワールドカップ 2025
タイルチェアコンペティション



公開審査会にて

審査員
鈴木啓太氏（プロダクトデザイナー）
中村ジュンコ氏（モザイクタイルアーティスト）
桑田卓郎氏（陶芸家）
尾之内明美氏（世界のタイル博物館館長）
岩井利美氏（多治見市モザイクタイルミュージアム館長）

タイルを椅子の座面に張り、美しさを競うコンペティション。第2回目となる今回は、座面にタイリングできるトリスケル（三脚巴）型を採用。テーマは「調和」。2つ、3つ、6つでの組み合わせなど、ユニットでの応募も受け付けた。10月6日に多治見市モザイクタイルミュージアム前広場で公開審査会を実施。101脚の応募作品の中から各賞が選出された。

表彰式は8日17時30分より行われた。審査員賞の発表と講評がされた後、ベストスワールド発表において、時高喜佐さんの「鳩」が紹介された。ところが選出後に、セラミックタイルではなく、オーブン陶土で製作したタイルであったことが判明したと司会者から伝えられる。一方でセラミックの概念が多様化し、判然としていない状況があり、そして何より芸術性や情緒性において優っていることを評価。審査員や実行委員をほとほと困らせたということで「ベストスワールド」ならぬ「ベストコマールド」が授与されることになった。図らずも、お風呂のコンペと同様に「タイルとは何か」が問われることとなった。

ベストコマールド、審査員賞、入賞の計21作品は、多治見市モザイクタイルミュージアム、INAXライブミュージアムにて巡回展示される。



ベストスワールド→ベストコマールド
「鳩」時高喜佐さん

「タイルは冷たい、硬い印象があるが、温かみや柔らかさがある」（尾之内氏）。鳩には小さな目が描かれていて愛らしい。



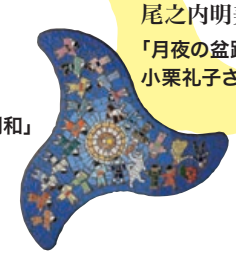
鈴木啓太賞
「まわりまわる」
佐々木康至さん



中村ジュンコ賞
「セラホコ?シャチスタ?」
TAKA兄さん



桑田卓郎賞
「植物・動物・人の調和」
西村陽太さん



尾之内明美賞
「月夜の盆踊り」
小栗礼子さん



岩井利美賞
「BEYOND TILES」
早川和俊さん

多治見市モザイクタイルミュージアムより

特別展示「山内逸三と藤井厚二」（開催中〜2026年2月1日まで）では、多治見市笠原町をタイルの街へと導いた山内と、「聴竹居」を手掛けた建築家・藤井厚二との繋がりに注目。関連企画として11月16日（日）に行われた街歩きの様子と、展示の見どころについて、清水雄也学芸員に寄稿していただいた。

唯一の現存！ 山内の美術タイルの施工例を見に行く

ガラス瓶のかけらを釉薬に

山周セラミック有限会社自邸は1976年頃の施工とされ、建物全体から窪むようにして設えられた玄関全体に1辺24cm、厚み2.5cmの山内逸三によるレリーフタイルが張られる。現在の社長である長江優緒さんによれば、「先々代が逸三さんと親しく、私の父、つまり先代が家を建てるとなったときに、逸三さんが『タイルをつくってあげよう』とのことで実現した」。

彫刻された紋様は菖蒲の花が様式化されたフルール・ド・リスと呼ばれる意匠で、鉄分を多く含んだ赤茶色の素地が印象の基底をなす。美しく貫入が入り透き通った釉薬は実はガラス瓶を割ったもの。当時も今も数の少ない緑や水色の瓶をかき集め、それを粉々に砕いてから敷き詰めて焼成したとされる。同行した特別展監修の加藤郁美さんは「美術タイルの施工例は内装が多く、外壁にこれほどの面積で張られているのは大変貴重」と熱をこめて語る。

山周セラミックは10mm角をはじめ、モザイクタイルの中でも非常に小さなタイルを生産している国内有数の窯元である。その小ささゆえに機械化が困難で、焼成前のタイルを手作業で匣鉢（こうばち）*の上に載せるなど、現在でも人の手をふんだんにかけたモノづくりが特徴だ。見学の最後には、「今は逸三さんのタイルの復刻に挑んでいます」という嬉しいサプライズを長江社長から聞くことができた。

＊焼成時にタイルを載せる耐火性の容器。

山内のタイルと藤井の陶磁彫刻

山内が戦前に製作したタイルの中でも一際存在感を放つのが、百合の文様を彫り込んだレリーフタイルだ。青と黄色の組み合わせは爽やかであると同時に、釉薬の揺らぎが全体に重厚感を与えている。山内がつくるタイルは色表現の幅が広く、型起こしによるレリーフやマジョリカなど、装飾的な意匠に大きな特徴があり、本作はそれがもっとも完成度が高く現れたタイルと言える。

藤井厚二は、自身が設計した建築と調和するやきものを使いたいという意図からその制作をはじめた特異な建築家だ。中でも動物の陶磁彫刻は特徴的で、今にも動き出しそうな「予感」とナチュラルなリアリティを感じさせる。鼬（いたち）はそうした動物群の一つであり、可愛らしくかつ精悍な顔の表情と佇まいが美しい。制作手法は型抜きを基本とするが、多くの作品が型抜き後に手を加えた形跡が見受けられる。そしてそのモチーフは、聴竹居の建つ大山崎の自然に馴染み深い動物が多く、日々の暮らしの中で培われた藤井の観察眼と人の手の温もりが、生き生きとした造形表現につながっている。

山内が若かりし日に体験した聴竹居を、藤焼を配置した内装写真とともに味わっていただければと思う。（学芸員・清水雄也）



藤焼（通常は非公開）を配置した聴竹居の内装写真も見どころ。



山周セラミック自邸玄関（多治見市）を飾る山内逸三のタイル。



10mm角という小さなタイルの生産には今も手作業が欠かせない。



レリーフタイルほか／山内逸三／1931〜35年頃／多治見市モザイクタイルミュージアム蔵
百合文のタイルは上から3段目、左から2、3番目の2点

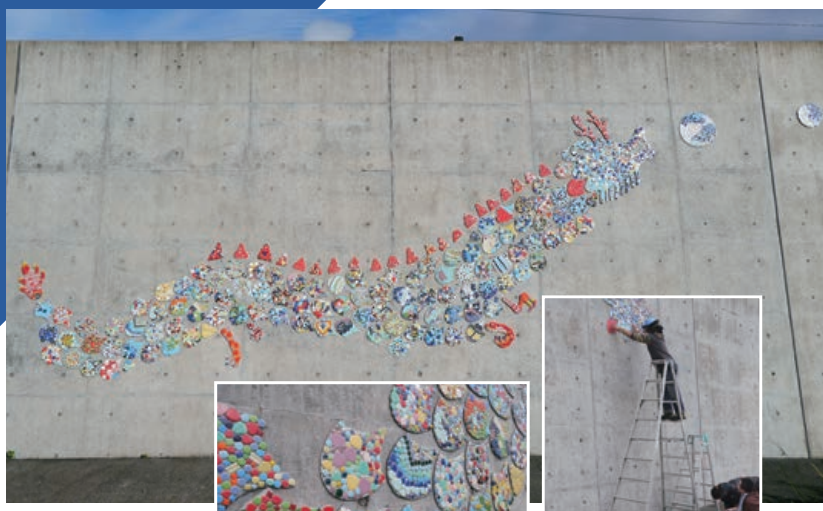
藤井厚二による動物の陶磁彫刻は、多くが初の公開！

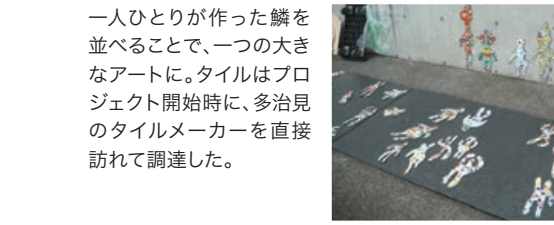


鼬／藤井厚二／1935年以前か／竹中工務店蔵

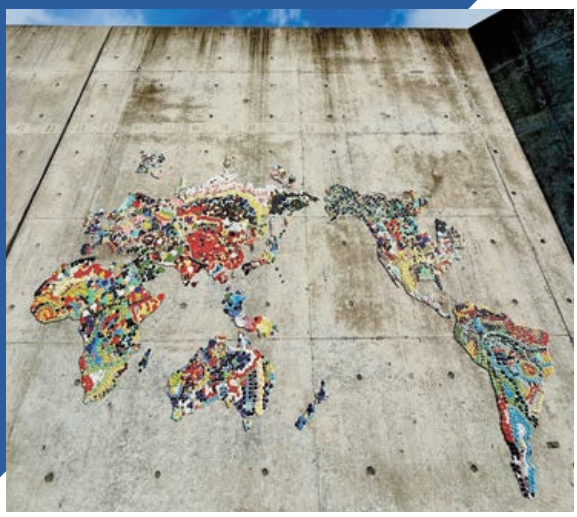
防潮堤のタイルアートが街と海と人を結ぶ

東日本大震災で多大な津波被害を受けた岩手県大船渡市。海と街を隔てる高い防潮堤が建設されたことを機に、2022年、防潮堤をはじめ防災教育の重要性が高いスポットをタイルで彩る取り組み「三陸ブルーラインプロジェクト」がスタートした。主催は一般社団法人三陸まちづくりART。4年目を迎える今年は、8月からタイルアートを制作するワークショップを実施。10月13日（祝）に防潮堤で設置作業が行われた。





龍は水をつかさどる神様。一人ひとりが作った鱗を並べることで、一つの大きなアートに。タイルはプロジェクト開始時に、多治見のタイルメーカーを直接訪れて調達した。



大陸の配置をスマホで確認しながら、位置を調整。



防潮堤にタイルの龍が出現！

BRT大船渡駅前には、ビジネスホテルや飲食店街、大型スーパーなど、商業施設が並ぶ。駅周辺は防潮堤から約400mが商業特区とされ、人は住むことができない。海までは徒歩10分程度の距離だが、高さ7.5メートルの防潮堤に視界が遮られてしまう。

10月13日の午前中、防潮堤へと向かうと、色とりどりのタイルが見えてきた。近くに大きな建物がない場所で、遠くからでも目立つ。

防潮堤の前には美術家の井上信太さん、ボランティアスタッフなど、10名程度が集まっていた。

「今日は龍を完成させたい。鱗は99枚あって、1枚だけ逆さまに張りたい。逆鱗に触れるという意味でね」。鱗1枚1枚の裏側にナノテープとシリコンボンドをつけ、コンクリート壁に張っていく。

和やかに作業が進む中、入れ替わり立ち替わり、様々な人が訪れる。高校の美術の先生、市の職員、子どもたちとお母さん。近所に住む男性は「ここに来るといろんな人に会えるから」と作業をにこにこと見守る。昼食を挟んで、午後は世界地図のタイルアートの設置に取り掛かった。小学生の子どもたちが手伝いに来て一気に賑やかになる。

15時過ぎに作業が終了。朝から雨が降り出しそうな曇り空だったが、西陽が差して、タイルがきらきらと輝いた。

「市民がタイルに触れて、防潮堤のコンクリートに張る。防潮堤を1000年かけて守っていく、参加型のアートです」と、井上さんは力を込める。

タイルアートはワークショップで制作。今年は8〜9月にかけて、岩手県5市町（宮古、大槌、釜石、大船渡、陸前高田）のこども園や老人福祉施設、高校などで開催。井上さんが制作した様々な形の下地に、思い思いにタイルを張った。

老人福祉施設では、子どもたちが訪れて、お年寄りたちと一緒にタイルを張った。「無口なおじいちゃんがいたんです。元は相撲の行司だったのですが、相撲好きの5歳の男の子が来て、取り組みの話で盛り上がったこともありました」。アート制作の場は、人と人とを結びつける場ともなる。





前日10月12日、陸前高田市で三陸×アジアの国際共同制作舞台作品「髪長姫」のショーケース公演が行われ、国内外の出演者たちが13日午前中に防潮堤を訪れた。ちなみに劇中でもタイルアートが使われた。



背景のアートは、継続して2年目の展示が決まった「防潮堤くん」。タイル1枚1枚を、防潮堤に直接張っている。





後日、寄付をした人のメッセージ入りタイル(15cm角)を追加で展示した。

海の存在をタイルアートで感じたい

プロジェクトの始まりは防潮堤の完成前に遡る。

京都在住の井上さんは、2016年に大船渡を訪れて以来、ワークショップや舞台などで地域に関わってきた。建設中の防潮堤を見て、「コンクリートの壁面を美しく親しみのある空間にしたい」と思い、タイルを張ることを思いつく。

一方、プロジェクトの代表を務める前川十之朗さんは2012年、被災者の証言を聞き取る仕事で大船渡を訪れたことを機に移住。三陸国際芸術祭のディレクターとして、地域に根ざした芸術活動を行う中、地域の人から「防潮堤が殺風景なので何かできないか」と相談を受けた。井上さんの思いを聞いていた前川さんが地域に広く話を持ちかけ、2022年4月、プロジェクトが立ち上がる。

当時の地域の人たちの気持ちや、プロジェクトに込められた思いを、三陸まちづくりARTの川元一恵さんに聞いた。

「防潮堤が完成したとき、いつも当たり前に見えていた海がまったく見えなくなり、寂しい、悲しい気持ちになる人がいたり、海が見えないのは(津波が次に来たとき)かえって危険と思う人がいたりしました。

また、防潮堤完成後に生まれた子どもたちにとっては、あるのが当たり前で、その理由やすぐ向こうに海が存在していることを知らない子もいます。

そうした様々な気持ちや状況が地域で交錯する中で、『見えなくなった海のラインを防潮堤に描いて、少しでも街の景観と地域の人たちの気持ちを明るくしたい』『三陸の美しい海を思わせるブルーのタイルでラインを描き、各地の防潮堤にそれが続いていって、人々が、景色が、地域が繋がっていけたら』という願いでプロジェクトが立ち上がりました」

「三陸ブルーラインプロジェクト」の名称の由来もここにある。





ワークショップの様子







「青の太陽」2代目
（2022年9月より3週間展示）



「椿」（2023年4月より3カ月間展示）

これまで展示された作品



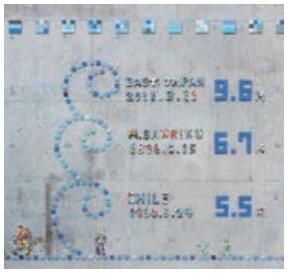
「青の太陽」宮古市のバージョン
（2024年9月より1年間展示）



「新三陸動植物大図鑑」（2024年3月／展示イベント）



防潮堤の向こうは
大船渡港



初めての津波表記（2023年4月）

期間限定から永続的な展示を目指す

試験展示を経て、2022年9月、三陸国際芸術祭の一環として防潮堤にタイルアートを展示。そのときは1カ月間で、以降は約2カ月半、1年間と、期間限定で展示する。期間限定なのは県に防潮堤の使用許可を得る必要があるからだ。展示期間の終了後は跡が残らないように取り外す。撤去作業に3日間、コンクリートを磨くのに1週間を要するといい、大変な苦労が偲ばれる。

「張って剥がすのもセッション。打たれ強くなりました」と井上さん。取り外すたびに「次回は違うデザインにしたい」と意欲的だ。外した作品は事務局で保管し、傷んだ部分は補修している。プロジェクトのウェブサイトトップページを飾る「青い太陽」はバージョンアップを重ね、たびたび登場。現在は展示されていないが、実物を見てみたくなる。

「いずれは永続的な展示を目指したいと考えています」と川元さん。

嬉しいことに、現在展示中の「防潮堤くん」については試験的に1年延長が許可され、初めて展示が2年目に突入した。今回設置した作品は、来年9月まで約1年間の展示が決定している。これも3年間の活動成果が認められてのことだろう。

一方、担い手の育成をはじめ、展示の仕方、資金調達など、課題は山積みと言い、活動を継続するための方策を模索中でもある。

井上さんに今後の展望について聞いた。

「1000年続くプロジェクトとして考案した『三陸ブルーラインプロジェクト』。まだスタートラインに立ったばかりです。今後はもっと地元の若い担い手と共に、アートを通して社会や人、モノ、空間を結びつける新しいコミュニティアートを伝えて行きたいと思います」

タイルに関してこんな嬉しいコメントも。

「最終的にタイルの文化を三陸で発展させたいと考えています。あと、100年後には三陸ブルーの色調の釉薬を開発したいですね。土も地元から採れるモノを使うのも面白いと思います」

「ロマンがあるじゃないですか」と井上さんは笑顔を見せる。100年、1000年という単位に、未来への力強い希望が感じられる。防潮堤を彩る三陸ブルーのタイルはどんな色になるのだろうか。



井上信太さん。現在、病院や施設でもタイルプロジェクトを進めている。

第47回 ジャパンホームショー開催

11月19日（水）～21日（金）、東京ビックサイト（東京都江東区）において住宅・建築関連専門展示会「Japan Home & Building Show 2025」が開催された。全国タイル工業組合が出展するブース「CERAMIC TILE PLAZA（セラミックタイルプラザ）」を紹介する。





ブース正面は六角形のタイル。



タイルが彩るカフェ空間





コンセプトは「Tile×Life×Cafe」

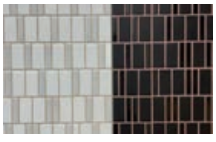
白を基調としたブースに色鮮やかなタイルが映える。今回はタイルメーカーや接着剤メーカーの28社が36パネルを展示し、新商品を披露した。

今回のコンセプトは「Tile×Life×Cafe」。ブース中央に本格的なカフェカウンターが登場。バリスタが常駐し、アンケート回答者にドリンクをふるまった。背面には濃淡のある青色の二丁掛タイルを横張りにし、高級感を演出するとともに、バリスタの動作を美しく見せた。カウンターの反対側にはベンチを設置。座ってドリンクを片手に一息ついたり、パンフレットを眺めたり、アンケートに答えたりと、大いに利用されていた。こちらはランタン型のタイルを全面に張り、エキゾチックな雰囲気に。ブースの外側からも目を引く空間となっていた。

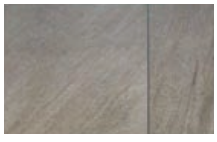
アンケートで人気だったタイル



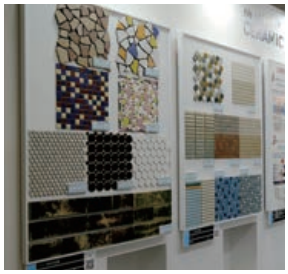
DAN DAN（久松製陶）

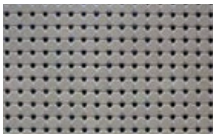


ウルタ（日東製陶所）



ヴィコレサンドリネア（LIXIL）

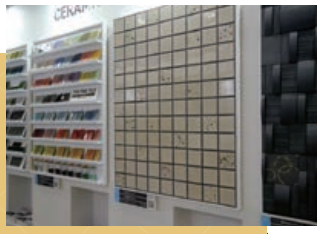




OLD CLUB SELECT COLOR
（オザワモザイクワークス）

各種モザイクタイル
（モザイク工房）

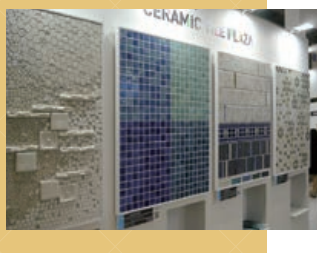
各社のパネル











全国タイル工業組合のウェブサイトで、バーチャルブースを公開中！

https://my.matterport.com/show/?m=fasU1DvF85e